

地域における地震体験談の収集と共有

Collecting and sharing of earthquake experience narratives in local communities

○森 伸一郎¹, 久木留 貴裕¹

Shinichiro MORI¹ and Takahiro KUKIDOME¹

¹愛媛大学 大学院理工学研究科

Graduate School of Science and Engineering, Ehime University

Community activities on earthquake disaster prevention depend on people's consciousness and knowledge about disaster. In addition, the people's consciousness on disaster prevention may depend on the presence and degree of disaster experience of the people in the region. Thus, knowing and hearing earthquake experience narratives leads to relieve the experience of someone else in the region and may be efficient for the advancement of the people's consciousness on disaster mitigation in the community. This paper reports the case studies of collecting and sharing the earthquake experience narratives in some regions and discusses the significance of them.

Keywords: earthquake, experience, hearing survey, collection, share

1. はじめに

現在、南海地震・東南海地震などの大地震の発生が危惧されており、その場合の災害は広域的で大規模なものと想定されている。災害対策のための施設整備などのハード面での公的対策はリスク低減のために有効な事業であるが、経済的な制約があるため、十分な規模で対象地域を早期にカバーすることは望めない。したがって、住民の地震災害に対する防災意識の高揚とそれによる自助・共助面での対策が望まれている。

そのため、防災意識の高揚や啓蒙など防災教育の重要性は、かまびすしく唱えられ、防災活動の中心に据えられている。地域における地震防災活動は、それに対する意識や知識に依存するが、防災意識は災害体験の有無に大きく依存すると考えられる。そして、災害体験がなくても地域住民の災害の体験談を知ることや聞くことによる追体験は地域の防災意識の向上に効果的と考えられる。

このような活動は、たとえば、地震津波の体験談に關しては、牟岐町の編纂した70名の体験談を核とする記録集¹⁾があり、また、徳島市は約2200名の体験者の協力を得て、509名の体験談を聞き取り、120名の地震の揺れ・津波・避難などの体験談を編纂している²⁾。

そこで、1946年12月21日に発生した昭和南海地震については、その体験者はまだ多く健在であり、彼らの体験談を収集して、それを共有することは地域防災活動に有効であると考えられる。しかも、その地震は、第二次世界大戦の終戦後1年余りに起きた地震であるので、戦後の混乱のため地震災害の詳細な記録はあまり残されていない。したがって、体験談からは、余り知られていない地域の地震被害について新たな発見もあり得ると考えられるため、地域災害研究としても有効であると考えられる。

ただし、終戦近くでは米軍による都市空襲のため、いくつかの都市では焼け野が原と化しており、地震の際には、空襲がなければ地震で被害を受けていたであろう建物や家屋はすでに戦争被害を受けていたことを意味する

ため、地震被害は過小評価されている可能性もある。愛媛県でも、松山市、今治市、宇和島市などの主要都市は大空襲を受けており、体験談の収集と分析にはこのことに注意を払う必要がある。なお、先に示した体験談集では、特にそのことに言及していないが、個々の体験談には「空襲で何もなかった」とか「戦後にバラックを建て土壁は打っていない」とかの記述があり、前述のような注意を払うべきである。

そのような目的と認識の基に、2006年より愛媛県内の各地で、愛媛大学として、あるいは愛媛地震防災技術研究会と共同で、各市町防災行政部署の協力を得て、昭和南海地震の体験談の収集をヒアリング調査を実施してきた。また、一部では、体験談を聞くとともに、地震の体験者に対して、アンケート調査を実施した。

本論文では、地域における地震体験談の収集と共有の事例を報告し、その意義をアンケート調査の結果を交えて検証する。

2. 南海地震体験談の収集方法

表-1に南海地震体験談の収集の概要を示す。体験談の収集にあたっては、はじめは体験者を捜し出し、個別でインタビュー形式で進めたが、その後、愛媛地震防災技術研究会会員、各市町防災行政部署、および各地の自主防災組織や老人会の協力を得て、座談会形式や電話などを用いてヒアリング調査を行った。座談会形式の場合の規模はその時々によって異なるが、被調査者の数は数名、多いときで15名である。また、南海地震60周年記念フォーラムにおいては、100名の聴講者を前に体験談を聞く会を催し、聴講者の反応などを調査している。図-1に調査を行った昭和南海地震体験者の被災地の頻度分布を示す。これまでに愛媛県内で44名の体験者に調査を行ってきた。主に松山市と宇和島市近郊を中心に調査を行っているため、この2つの市における体験談が多い。

図-2に調査を行った昭和南海地震体験者の当時の年齢

表-1 南海地震体験談の収集の概要

調査概要						体験談を話してくれた人の属性													
調査会名	調査地	調査概要	調査者の人数	体験談の収集数	調査日	曜日	被調査者のイニシャル	調査時の住所	体験した場所	調査時の年齢	被災時の年齢	性別							
	宇和島市			1			K.N		愛南町 深浦地区	84	24	男							
	宇和島市	座談会形式	3	4	2006年12月9日	(上)	T.I	宇和島市津島町増穂	宇和島市 津島町増穂	69	9	男							
Z.S							宇和島市津島町嵐	宇和島市 津島町嵐	79	19	男								
T.M							宇和島市津島町下灘	宇和島市 津島町下灘	71	11	男								
M.S							宇和島市津島町	宇和島市 津島町	65	5	男								
M.S							宇和島市狩津	宇和島市 狩津	78	18	男								
				2			L.K	宇和島市神埼	-	-	-	男							
	松山市	1対1の対応	1	1	2006年12月30日	(水)	T.M	松山市南江戸	松山市 南江戸地区	78	18	男							
	宇和島市	電話で対応	1	1			H.U	宇和島市柿原甲	宇和島市	82	22	男							
南海地震フォーラム	松山市三津	座談会形式	2	9	2006年12月18日	(月)	Y.A	松山市三津2丁目	松山市 三津地区	76	16	男							
							K.T	松山市三津2丁目	松山市 三津地区	80	20	男							
							N.N	松山市梅田町	松山市 三津地区	65	5	男							
							M.N	松山市住吉2丁目	松山市 北きほ町	79	19	男							
							Y.M	松山市住吉2丁目	松山市 三津地区	86	26	男							
							K.N	松山市神田町	松山市 三津地区	77	17	男							
							T.N	松山市	松山市 三津地区	74	14	男							
							T.B	松山市住吉2丁目	松山市 三津商店街	82	22	男							
							N.M	松山市三津3丁目	松山市 三津地区	81	21	男							
南海地震60周年記念フォーラム	松山市 査町6丁目	フォーラムにて講演		4	2006年12月21日	(木)	T.I	宇和島市津島町増穂	宇和島市 津島町増穂	69	9	男							
							M.N	松山市住吉2丁目	松山市 北きほ町	79	19	男							
							K.N		愛南町 深浦地区	84	24	男							
							T.M	松山市南江戸	松山市 南江戸地区	78	18	男							
事前調査兼昭和南海地震体験座談会	宇和島市津島町須下	座談会形式	2	11	2008年2月26日	(火)	L.K	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町須下	80	18	男							
							T.K	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町須下	73	11	女							
							K.S	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町須下	83	21	男							
							A.N	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町須下	75	13	女							
							H.N	宇和島市津島町須下	松野町	88	28	女							
							T.H	宇和島市津島町須下	西予市 三瓶町	76	14	女							
							K.H	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町後	82	19	男							
							T.F	宇和島市津島町須下	愛南町 魚神山	75	13	男							
							T.M	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町須下	75	13	女							
							F.M	宇和島市津島町須下	宇和島市 津島町			女							
							K.Y	宇和島市津島町須下	滋賀県	79	17	女							
							昭和南海地震の体験談を聞く会	松山市 雄郡地区	座談会形式	9	15	2008年3月15日	(上)	S.A	松山市末広町	松山市 小栗町	72	10	男
														I.I	松山市	松山市 菅沢	70	8	女
Y.K	松山市永代町	久万高原町 美川	80	21	男														
N.E	松山市泉町	伊予市 双海町	83	21	女														
Y.Y	松山市泉町	久万高原町 直瀬	81	19	男														
Y.K	松山市末広町	東温市 則之内	78	16	男														
K.M	松山市永代町	福岡県 門司市	73	11	男														
Y.T	松山市竹原町	松山市 中島町	91	29	男														
Y.N	松山市小栗	松山市 小栗	81	19	男														
M.W	松山市藤原町	久万高原町 父二峰	72	10	男														
M.S	松山市小栗5丁目	松山市 小栗5丁目	78	16	男														
M.H	松山市泉町	松山市 泉町	80	18	男														
A.H	松山市市坪	松山市 市坪	74	12	女														
S.H	松山市雄郡2丁目	砥部町 (旧広田村の変電所)	83	21	男														
K.S	松山市	松山市 小栗6丁目	75	13	女														

の頻度分布を示す。調査は当時16~20歳だった人を中心に行っている。当時の年齢で5歳から29歳の体験者から調査している。現在、昭和南海地震から62年経過していることもあり、体験者は高齢となっているため、収集を急がないと貴重な当時の状況はわからないままになる。体験者の性別は男性33名、女性11名である。なお、表-1中の南海地震60周年記念フォーラムの被調査者は、それ以前の調査対象者で体験談を疲労して戴いた。また、宇和島市神埼のI.Kさんは未経験者だが、地区内の体験談を知っており、伝聞体験談として取り扱った。

写真-1に松山市三津での体験談座談会の様子を示す。自主防災会の役員を中心とした体験者である。このときは、初めての試みでテレビの取材があった。この写真にあるようにデジタルビデオカメラで映像と音声を記録している。写真-2には松山市雄郡での座談会の様子を示す。

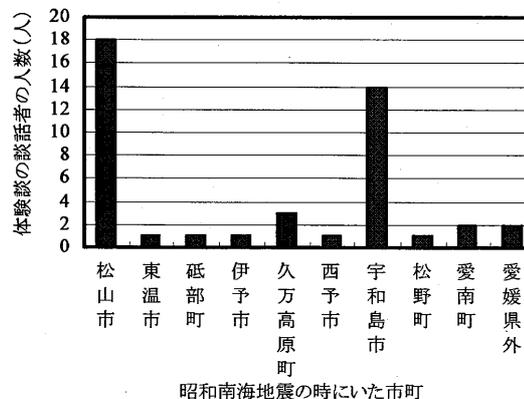


図-1 調査を行った昭和南海地震体験者の被災地の頻度分布

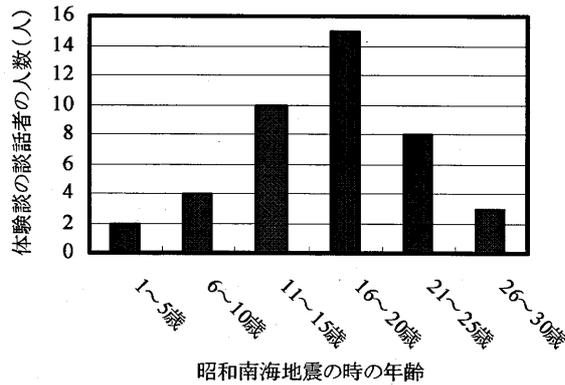


図-2 調査を行った昭和南海地震
体験者の当時の年齢の頻度分布

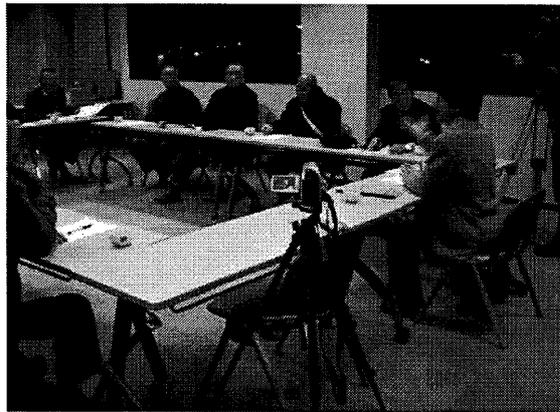


写真-1 座談会の様子 (松山市三津, 2006年12月)



写真-2 座談会の様子 (松山市雄郡, 2008年3月)

老人会の協力を得て15名の体験者が対象である。撮影するとともに、ICレコーダーで音声を記録している。

映像として記録することで、後で文章化するとき被調査者の声と顔を一致させることができ、作業の効率化と正確化に寄与している。また、ICレコーダーでの録音は、話し手にマイクのようにして使ってもらうことで、より良質な記録とすることができる。この時の注意点として、複数の人が一度に発言をすると発言内容が分からなくなるため、1人ずつ発言するようにし、聞き手の相槌なども極力入れないように注意した。

この録音した内容を文章化するとともに、体験者の肖像をデジタルカメラで撮影した。体験談集にする際にリアリティーを高めるためである。これにより、地域での出来事として親近感を感じさせ、興味を持ってもらうためである。また、地域の方言を残したまま文章化した。

3. 調査結果

(1) 記憶の限定性と鮮明さ

ヒアリング調査を行ってみると、60年ほど前の出来事であるにも関わらず、揺れの結果に関する質問に対して答えられることに限度があるものの、ほとんどの人が自己の体験した地震時の様子を鮮明に覚えていた。しかも、体験談ゆえに話しが非常に具体的で個人的で、また、大地震の体験が非日常的であるがゆえに普段では考えられない行動に個性や個人的な状況が反映され、極めてリアリティーがあり、聞く者に関心を誘起させ説得力があることがわかった。

また、体験談を話し出すと、白熱して話し出す人も多く、体験談を話したいという潜在的な欲求があるのかもしれない。また、話している体験談について深く質問することで、当時の記憶をさらに思い出し、様々な揺れや被害の様子などを詳しく話す人もいることが確認できた。

(2) 新事実の発掘

松山では津波に関する記録は皆無であった。当時の新聞にも、松山の測候所の記録にも記録はない。しかしながら、海に面した三津地区での座談会では、津波の発生について2名から体験談を聞いた。

M.N.氏(当時19才)の体験談では、「みんな「高潮じゃ、高潮じゃ」言いよるけんね、「見に行こうや」言うてね、浜へ見に行ったんですが。魚市場のとこにね。海岸にみんな「いけす」一杯並べて置いとったんです。潮がずずずずと上がってきたら、それが一緒にずだ一つと流されてね。海の方からこう上がってきてね潮が、ざ一つと流れて行きよんは見ました。」「おそらく栄町、松原、宮前、皆もう水に浸かったと思います。」とのことで、津波の様子が語られた。

また、K.M.氏(当時20才、三津の魚市場での仕事からの帰り)「あそこらへん製材所が3軒ぐらいあって、富谷製材と仙崎組それと新田製材と、そこらあたりは池(貯木場)だったですね、材木がゴロゴロゴロゴロ転がりよった。流れよった。脛(すね)まではありました。水が上がったです。波が上がってずっと引いてない。製材所の材木が流れて水浸しになると言う経験があります。」とのことで、津波による材木の打ち上げがあったことが語られた。

(3) 揺れ体験や被害の観察結果に基づく震度の推定

同じく三津地区(海岸埋め立て地)では、T.N.氏(当時14才)からは、被害に関する多くの被害に関する記憶が紹介され、「下から盛り上がるように形成された灰色の粘土状の土」から液状化による噴砂であること、「粘土のような噴砂は、浚渫埋立地の噴砂の一般的特徴であること、これらにより震度5強であったことがわかる。また、「三穂神社の石碑が倒壊、石の柵が倒壊」からも震度5強程度であることがわかる。さらに、「松原町では、土蔵、土壁、土塀の多くが崩壊」という観察証言から、震度5強～6弱であることもわかる。

宇和島の南方の津島町下灘では、T.M.氏(当時11才)によれば、「地震が来て、起こされたら、わいわい近所の人が起きて出ている。」「大人の人が「来たぞ、来たぞ」と言って津波が来ていた、そしてまた引いた。そういうのが何十回と続いた。」という津波の目撃証言ばかりか、多くの被害観察の記憶が聞かれた。「家を出るとき自宅の床の壁は大分落ちていた。隣、近所の壁も路地に落ちていた。瓦は、全部の家で被害。」「自宅から150m、海拔25mぐらいの墓場に逃げ。墓石は1割は倒れていた。ものすごい崖崩れがあり、幅150m、砂煙が上がったと聞いた。段々畑の石垣が何十、何百箇所崩れていた。」「本震直後、外に出たら外の道路がすごかった。

